

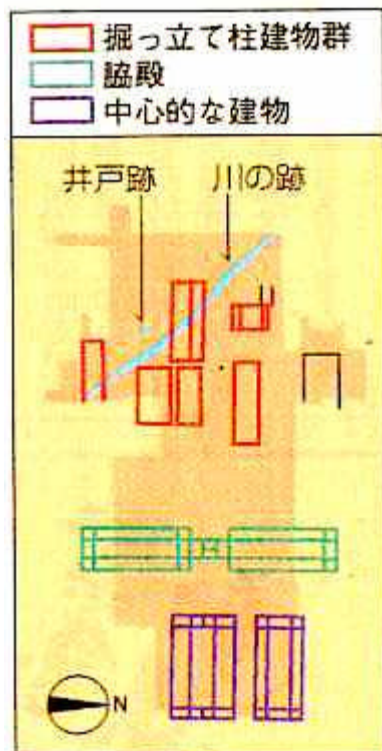
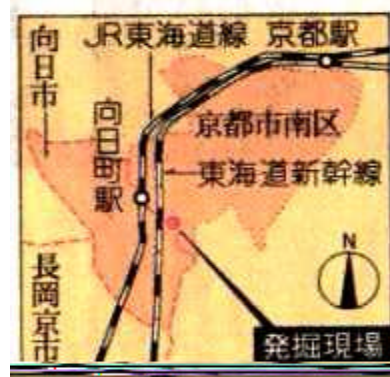
「短命の都」長岡京に光...

# 桓武天皇の離宮跡？発掘

古代の都市で最大

10畝に建物13棟

京都・長岡京（七八四 - 七九四年）跡の発掘調査を進めている向日市埋蔵文化財センターと古代学協会は三日、都の北東部から内裏の中核施設に匹敵する規模の十三棟の建物群が見つかった、と発表した。発見場所や建物の大きさ、出土遺物などから、桓武天皇が儀式や供宴を開いた離宮跡の可能性が高いという。約十畝に及ぶ範囲で見つかっており、これまでに発掘された国内の古代の都では最大の離宮になるという。短命のイメージを一変させる、貴重な発掘となりそうだ。



大極殿の建物に匹敵する大型の建物跡。礎石と掘っ立て柱が併用された  
と見られる = 3日午前11時45分、京都市南区久世殿城町で

発掘現場は京都府向日市と京都市南区にまたがる地点で、長岡京の内裏から北東へ約一・五<sup>〇</sup>離れた北一条大路と東二坊大路の交差点付近にあたる。約六千平方<sup>〇</sup>を発掘調査した。

十三棟の建物跡は方位に従って整然と配置されていた。中心となる建物のひとつは南北四間（柱間の数が四つの意・約十六<sup>〇</sup>）、東西九間（約二十七<sup>〇</sup>）、四面にひさしが突き出し、南北部分のひさしは長さが約五<sup>〇</sup>もあった。長岡京跡でこれまでに発掘されている建物では、内裏の正殿に次ぐ規模だ。

その北側の建物も四面ひさしで、南北四間（約十二<sup>〇</sup>）、東西九間（約二十七<sup>〇</sup>）の大きさ。これら二棟の中心建物の西側には、南北九間（約二十七<sup>〇</sup>）、東西四間（約九・五<sup>〇</sup>）の脇殿が二棟見つかった。

溝跡からは、杯など土師器製の食器類が大量に見つかった。木組みの井戸跡（一・九<sup>〇</sup>四方）には、天皇直属の役所を示す「旨」の文字が刻印された瓦があった。

今回の発掘について奈良国立文化財研究所の金子裕之研究指導部長は「長岡京は未完成で、平城京から平安京に遷都するまでの中途半端な都だった、という従来の考えを一変させる貴重な発見だ。離宮とみられ、古代の首都であった長岡京の造営が、周到な準備の上で進められていたことがうかがえる」と話している。

五日午前十時半と午後一時半から向日市森本町戌亥の発掘現場で現地説明会がある。

**長岡京** 桓武天皇（在位七八一 - 八〇六年）が藤原種継に命じて造営した都。七八四年に平城京から遷都し、大極殿などの主要な建物は難波宮から移築された。平安京への遷都（七九四年）に伴い、わずか十年で廃都となった。種継の暗殺により造営は打ち切られたとされるが、これまで大極殿跡の発掘など約千五百回に及ぶ調査で、完成間近な都だったとする説が定着してきた。